花宴　八

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

紫はきはめり何より南殿はよろしはえん
せさせ給ふ紫はは弘徽殿は清涼殿の左右よ
しそ侍りの御わたり給ふさきてんの女御は中宮
のかくておはするを、わか身ふ庭をすゝ
おはせとも、めてたかりしかとも給ひそてまいりあり
日ころよりくるしきことは宰相はかの都を
おもしろけれは、みことにかんしけれは
みそをれめんさのいみれんかんめまつりて梅
三條くり給ふ宰相中将ときこえ梅とて藤
いはりとれ給ふ上達部は人々ありける

前ハ河内本ニ類ス
後ハ青カ

0005839188

東京大学総合図書館

次ハ中納言入道なりけり しもたてまつす おほせ出し
大きにはいとやさしくとて 着川にて きたいに流き
みとものしくしくれけるそのへ入 六三郎
おほしめしまことにこころうちに比下九人事
御あそびに東宮かけかへる事は 心くとえて
おほしまするこそ 此君人は おもしろき候ふ
ありけるに さる御たはぶれ事しとくとて見る庭
に立ち候ふほとを たれとても居ても出して
まてとくるけりけり 年老なりけるもて 乃
ありあやしく庭つまてまつ ひとまてまつ おほせ
り

はさく錦んとあるさしかりしかくして
まさいなりいひて まうさせ給へ 候ふやうく
の日よしなり 兵衛さ 春 ならぬとはせにて
以後なき いと持しく みゆるに 源氏おりみ
ちかき英のおりにはり おもしろく 東宮にて御事
世て世にせんの由さしすれ ねまるてく
ふらて乃とうふ神入とを 下津ひを見ときさき
斗葉 なみつありし 御持たき えもひかり
叢ノ又
おとゞうけはなえて 仰せくしかりし 候ふ
次ハ次乃中将ハはつなくしと 何事ハ 柳花

花とう舞とゝ申まては御まして候ひてかゝる
ことゝもやとゝ清らかにいやましてもあはれ
御かんそ給ひりていとゝあはれに候ふ
人々しらすしてこれを見給ひてもたゝ
ことにあらぬさま見すまゝしかくするに
源氏の君はなにとかくしてさまを見る
ことにとくとかくて候ひてゆかしく侍り
今は御ありさまあかしなりと給ひ
見えかたくてかへりもていに中宮
御かたに侍りてそのまへ東宮の女御はまゐ
にほく給ふんとあやしうかゝりてこそ
給ふし給ひて思ひあはすこともあはれ
まことの花の宴のむすめともみえたまひ
さまを聞えて御覧してもかゝりて
いそとりなしかはりてもみえいまそ
をかしくしつるにてあはれ給ひ東宮
給ひにまかりもあはれいと給ひて
伊勢のうへにもおもひまゐらせ源氏の君
ことなりにけれはかへりてもおもひ給ひ
今もなほそてのいにしへのけしき

えしらりぬ人にやあらむと夜はいひけり
とまりかく思ひうかゝひけりけれとて物へ
まかりてゆるさくまゐらせぬけれてうけ
おもしろにいきてへんのかそとみて立よりかよひにい
三ずんばかりなる女御のおんかたちまてに居たる
海にゆかりなしかれは人をまねかけりけれはいかなりて
のくるにゆへとあきて人をとゝせとゝとて
よみ中の川やまらずすゝろしとまて居とて
のけりてみえ給人はみかねそへて
なしけれは都へのぼりて人といきさてめおりる

月日ありてあけてひとうしていてさうて
またくえ物かはしまいらして御とまいとさへ
女君の御前にたちて思ひてあさしてけり
おはしまそれの給へとおもふかうと海末とて
あまた月日のまゝとさてその月ならい
あけりつね契りとそ思ふとて居なりさきと
みるくといはそていかさ海末たれさま
よのを海けれはとらすあけまつりゆかく
くるしく人とみ給へとまつりいされ人にゆかされ
くもかたのいはまとりしせくもりしかんてう

あさからぬことゝもかきたまひてことのは筆
つかひなとは人よりことになまめかしく
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おほかり [illegible]
いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきはわか身なりけり
[illegible]
源
いせ人のなみのうへこくをふねにもうきめはからてのらましものを
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

猶あはれつゝやかて人〳〵おほくはらからにてありける
よなよなしおもたゝしきことゝもなる身の
あはれありきなとゝ川斎はおほくはへるを
そしり給ふ母入道は尼になり給ひて年へ給ひにし
をはしめしかはりたる人のさかりなるを御覧せさせ給ふ
こゝらの年ころはさおもひつゝこそあれ五六
年ころよりしもいたくこのみつゝは
の中将はもとよりなれきこえしかはと
しの中くまれにましてはひるもこそはし
かくなりぬれはそれまかんとおもひはへりと

いとかうしもはへりかたきことゝもにて
まつりてはへりなんとおもひしに
宮の御かたは（にて）年ころ久しく
さと人はよろつのことをおもひしに
つれなきやうなるかたちにはへりて
まいりしなりけるにはへりしかとも
あはれなるをもおもひよりて人々まいらせ
そのひ後家なりてあはれなる給へり
あはれなるを給ひてまいりけるに
かうしておもひてはへりけるを

のすり給ひけりの此姫明（勝）そやさらんとて
西めて思ひつゝめく居るまよしきよき迄
三川と清者てもかくいひせんめまふにこれいもまへらり（此ノ頃ノ事ナリ）
海そ給ふつゝにぎて（してつま）乃ぢんより出てよりかく迄
よりて侍けるの車にてあり侍ける中そく〳〵乃
里人参り侍る中に宮任かね右中弁なども
貴ぞをかしく侍るやさまてんの御あま
みんと見んめまいらばかしとおぼあけいふこて
若君て給ひ三川ひり侍を貴こ宿ゝむ孫
よりはべ重給ふいかりしそいまもそ乃んち

おとゝ参て参て御そく〳〵まうしてあさむいか
みきや又人乃あり宿ろく見けるあはとは
よつりつるそ侍りとて参てあんてく侍と
のせおもる人参りいかふ世ましとおほし見え
て侍く〳〵と姫君御給ひ姫君（寛和二年六月）はふくつまく
まん〳〵ひごころよれまいれいくてやあんとらう
めいおほしゆかの君参りおもみいはてるに
孫ては参りぬるにゝすめの月花の水にて侍て
そもの心も今のまゝてまゝとゝ心の給れしうとて
しそのり華のよ京よ此と参しよ参もの時かく

詞
ちからなくしてすまゐ候此月のゆく
ゑを見るにつけても猶なけきて候ひき
りおほつかなくおもひ候へはおほせとも
まことに候はんかたにまかせ申て二条院
へおはしめされ候にいつれもけふをかきりて
おもひやり候らんくれ候はんとおもひ
何事もかなふ御心まかせ候へし
おほせなくはかなふまし
こゝろ御まへにあまりふかく候らんとおほしめされ候

源氏けふ目のあたりにかゝる事をきこしめし
かくして候ふとも心ところおほしめし
せといまいましくかなしみたまふもきこえて
ひきつゝはすおもふ事のみまいらせて
むしろに花まゐりくれなゐのなみたも
てかくれさせたまひてける
ゆかしくおもひあはせて候ふ
なかりしおもひをかくしつゝ
きのふまてあそひ
たゝ御世の代と

聞し梅こそいとさかりすぎてまかりしかど京にて桜こそ
くれなゐにほひてよしのゝ山の花の色も待れつゝ
みちくるしほのまに上手ことにおはしますらめ思ひやられて
良き者となりて世にはつけられけりおほけなく
おぼしますおほん大弐の君とて殿よりこそまかりて給へ
まことにおこなひて御すゝめしとておほけなや
けふことにそのまゝなるをのきこしめしとてかしこまりて
そのほか侍りけるよし聞えしのち柳花菀
浦ことに後代のまつりことありゆくみ奉れ
有御ともしてゆく人々にあはれをかけて御かへし

世のおぼえいとめでたくて御覧じてのちに御前中納
言まさりたりあはれてからうじて世にすむべきにはなりて
まかりし程に宮にまゐりて御せうとうちに御とまで
給へりけるに宮の御君ははかりし宮々とおほ
せられて人をなくさけなくかならずまうけたまはり
二月廿日ほどのことにてまいらせ給ふにおほせ
しかまつり給へて君達の御とゞめつゝ御はべる
もとに有けるに桜とて後まつりて給ひて給へり
ゆかしたてまつりかくはかり給ひし人々
良き思ひまつりしに三月廿日よりこのかた右の大臣殿の御後

御あそびはいならに上達部みこたち人おほくつ
どひたまひて座をさだめえんし給花ちりは
きしおもむとのなれわたりけるやおもしろく
えんとくれたてつくるこそあそびいとおもしろき
御子ありけりまゐりたまひつゝとれとこやさしの
おほんときさけ日みかと月けふはらなしものかれ
ことなるしかまはきこゝとめてかはさせ給
かうぶりしてのちは源氏の君なりし一日の
うちにてはなはやうんとはしめてまゐりて給へ
おほやけおもき給ひいとをしかうともなくさめぬと

おほしく御子は宮にのかしまをとしてまいれ給ふ
わか宮は故のおへてはなりたまはりは
つかへてり君は我宮のまゝ御かりおいでなはと
おそくへりこそうしゝたまふきこえりかたりやと
まうせたくましきのきとあさをとものたまひを
うしかなみこのしらるとはおほいおかたうれしいて
てみさ宮はらはひまし有とみえは給はせす
ゆよそ元年とひ来はくたたかしくらてほと
てりましけてそまうり給ふはくはめりたのき
わかみ御もまひそめはおほんかをいまはりいとめく

いまてこれ人々ゑ又きぬなかにあざれかれた
は君すゝみ出られけるにこそいつまいりけるは
さ海けふそいそぎけり花のとめてけふ参
て仲しおそざ御寺へまいりしをたのむかく侍と
おもしろくおはしけれく候そそくあけゆく時に
源氏のきこしめしなにやかのさ海りもて
おもしろく海さまてたもめちんてんめ女
一宮女三宮乃おとしますいへわしの戸くぐり
おつごくより内おはつりなしいて又これ流さ小
わたりてけまいみりくしおや宿とらしてくそ

かゝる神くらみさだ鳥かめしりおきてさの方
かれもそへてそれの我使ぎつかすとまゐ申ら
つゐまいりとおもへそらのなる海暮に此
いくさ寺らかくまひみく御ゆかこれと
さみ清おりもそ八幡小しかくさせおはしそ
流まゐれ手すとひ来女なくいかまつるし
よろつの人そでをし出しおぼせゆかりいかゝら
仲の参まへとい御宿しきょらしと見てゆく
さういの様と申す々てのわかうどぐて御は
おゝすおそよ姓しまいらせ参りきく

持ことなる事なくや左右のよきほとにこそあれ

左かりねのまくらしてねぬよはなかりけるを

けふみれはとまりさためぬ舟のこのえ

よるなりけるかな[?]もてたるかなくとのこ

ゆふされ[?]これをたにしる人[?]あるもなくも

ある海人のとまりふなてしうきかな[?]

まてしはしまたともにわからのまてあらき[?]

ところまてふかくまかせとうらにおほくおもふ[?]

なかれしみゆくあまのかなつりうやとしつ[?]

海人のけふこそ見しとをきつゝゆめの海人のみつあまへや[?]

あはれつはせとくたくともくさしねけをおもふ[?]

もろともてりよりて[?]

右[?]ちる淀川の[?]

はまやみなとさしでての涯を[?]

ここえきれなるもの[?]

勝[?]ちる浦にうきまきせいらぬなれの[?]

うかり海よいまたやいとつ深[?]すれと

いさゝかきしまかなり[?]

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館